

瓔珞みがく

(大正九年桜星会歌)

佐藤一雄君 作歌
置塩寄君 作曲

一

瓔珞^{ようらく}みがく石狩^{いしかり}の

みなもととほ

源^{げん}遠く訪^{もと}ひくれば

原始^{げんし}の森^{もり}は闇^{くら}くして

雪解^{ゆきげ}の泉^{いずみ}玉^{たま}と湧^わく

二

浜^{はま}茄子^{なす}紅^いき磯^{いそ}辺^べにも

鈴^{すず}蘭^{らん}薫^{かを}る谷^{たに}間^まにも

愛^{あい}奴^ぬの姿^{すがた}薄^{うす}れゆく

蝦^え夷^ぞの昔^{むかし}を懷^{おも}ふかな

三

今^{いま}円^{まる}山^{やま}の桜^{さくら}花^{はな}

歴史^{れきし}は旧^{しゆ}りて四^し十^{じゅう}年^{ねん}

我^わが学^{まな}び舎^やの先^{せん}人^{じん}が

建^たてし功^{いさお}はいや栄^{さか}ゆ

四

その絢^{けん}爛^{らん}の花^{はな}霞^{がすみ}

憧^{あこが}れ集^{つど}ふ四^{よん}百^{ひゃく}の

健^{けん}児^じが希^{のぞ}望^み深^{ふか}ければ

北^{ほく}斗^とに強^{つよ}き黙^{もく}示^しあり

五

醜^{しよく}雲^{くも}消^きえて人^{ひと}の世^よに

陽^ひ光^{くわ}はうららかに輝^{かが}けど

風^{かぜ}の名^な残^{のり}のつきやらで

狂^{きやう}瀾^{らん}さわぐ今^{いま}し今^{いま}

六

潮^{うしほ}に暮^くる西^{にし}の空^{そら}

月^{つき}も凍^{こほ}らむシベリ^アの

吾^わが皇^{みいくさ}軍^{ぐん}を思^{おも}ひては

猛^{たけ}けき心^{こころ}の躍^{おど}らずや

七

白^{しろ}銀^{がね}狂^{くる}ふ埋^{うも}れ路^じも

踏^ふみて拓^{ひら}かむわが前^{ゆくて}途^て

はろけき牧^ま場^きに嘯^{うそ}けは

雲^{くも}影^{かげ}はやし草^{くさ}の波^{なみ}

八

想^{おも}を秘^ひめし若^わ人^{にうと}が

唇^{くちびる}かたくほほゑみつ

仰^{あお}げば高^{たか}く聳^{そび}え立^たつ

羊^{よう}蹄^{てい}山^{さん}に雪^{ゆき}潔^{きよ}し